

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

vivo

1&2

JANUARY/FEBRUARY
2005

CONTENTS

ニュー・イヤー・コンサート2005	1
日本のうた セミナー&栗コーダーカルテット	2
現代音楽を楽しもう 須川展也	3
武久源造オルガン・リサイタル	4
ちょっとお昼にクラシック4	5
最近の公演から	5~7
ネタマ	7
インフォメーション	8



写真上;ニュー・イヤー・コンサート2004
下・左;須川展也 © 中島正之 右;武久源造

愛と平和が(ほんとうに)必要です。 1/5(水)ニュー・イヤー・コンサート2005

いよいよ今年も残すところあとわずか。皆様にとっての2004年はいかがでしたか。「今年は充実していた」「ちょっとたいへんな年だった」...いろいろな思いをそれぞれの方が抱かれています。多くの方に共通しているのはきっと、「世の中いっただいどうなってしまうんだろう?」という思いではないでしょうか。イラクをはじめ世界中で打ち続く戦争と動乱、ひとつの国が分裂してしまったかのような米大統領選。国内に目をやれば次々と明るみになる不正や不祥事、痛ましい事故や憤らずにはいられない犯罪の多発。さらに数多く日本を襲った台風や、新潟中越地震など、各地に甚大な被害をもたらした自然災害の数々...。新しい年に向けて、希望の光を灯したい、と心から思います。

そのようなわけで、2005年の水戸芸術館ニュー・イヤー・コンサートのテーマは「LOVE & PEACE」。こんなときだからこそ、音楽が持つ力で、疲れてすんだ世の中を元気づけたい...という思いをこめ、私たちはこのテーマを掲げました。

コンサートの内容は例によって当日までの秘密ですが、「LOVE&PEACE」の思いを伝える曲目を、出演者と協議しながら選びました。また今回は、2回目となる「大吉リクエスト」のお題を「あなたがLOVE&PEACEを感じるこの1曲」とし、皆様からのリクエストによる選曲も取り入れています。

どんな曲をやるのか、年末年始の楽しみに考えたい、という方のために、いくつかヒントを出しておきましょう。専属楽団メンバーによる「スペシ

ャル合奏団」は毎年、ふだんの水戸室内管弦楽団のレパートリーとはひと味違う曲目を演奏します(ヴィラ=ロボス ブラジル風パッサ やヨハン・シュトラウス 世 皇帝円舞曲 のシェーンベルク編曲版など)。今回は偶然にも、MCOが演奏した「あの」深い祈りの曲をやることになっているのですが、その他、「戦争」を戯画化した恐るべき(?)作品が演奏されます。専属楽団メンバーの中でも、久々の登場となるのがフルートの工藤重典さん。今年は友の会主催のリサイタルでも名演を聴かせてくださいましたが、弦楽合奏と共にフルート協奏曲を奏でます。冬のような世の中に春を呼ぶ、鳥の声のコンチェルトを...。さらにフルートの加わった室内楽の最高の名曲といえる古典派の「あの曲」も聴けそうです。お楽しみ専属楽団メンバーのソロや室内楽は今年も盛りだくさん。19世紀ドイツと20世紀アメリカの作曲家がそれぞれ、神に召された母に贈った深い悲しみと癒しの名曲や、ロシアの大ピアニストが独唱のために書いた名旋律、あるいは20世紀の大チェリストが平和への祈りをこめて演奏した故郷の民謡、そして20世紀後半のスーパー・グループの「あの名曲」などなど...。ただし、ひとひねりした形で出てくる可能性もあります。

なおゲストとして、今年ATMアンサンブルやMCO定期演奏会で活躍していただいたヴィオラの川本嘉子さんが登場します。昨年に引き続き登場の野平一郎さんはピアノのほかにチェンバロも演奏。中村静香さんは今年もヴァイオリンとヴィオ

ラを持ち替えての大活躍。さらに今年は、3種類の楽器(?)を奏でる人も? MCO第53回定期演奏会(2003年2月)に出演し、小澤征爾音楽顧問のタクトのもと、モーツァルト エクスルターテ・イウピラーテ の名唱を聴かせてくれたソプラノの森 麻季さんのステージも期待大。LOVE & PEACEをテーマに曲を選んでいただいておりますが、今年発売され大ヒットしたソロ・アルバム『あなたがそばにいたら』(エイベックス AVCL-25005)に収められ、森さんの代名詞のようになった「あの曲」が歌われるのは間違いのないところでしょう。そうそう、チラシ発表の時点ではまだ確定していなかった出演者が、新たに決まったこともお伝えなくては。久しぶりの登場となる、ATMアンサンブルのチェリスト、上村 昇さんです!さらに校了直前、今回の司会者も決定しました。TBSアナウンサー、長岡杏子さんです!

この中に、皆様から送っていただいたリクエスト曲のうち人気が高かったものも、かなり入っています。どんなものが出てくるか、どうぞお楽しみに。残念ながら複数のリクエストが集まったものの編成が大きすぎて見送らせていただいたものもあるのですが、どうかご了承下さい。

それでは、1月5日、水戸芸術館から、愛と平和の音楽が世界中にむけて伝わりますよう...。チケットはもうほんとうに残りわずかですので、お求めはお早めにどうぞ。

《矢澤》



前回の「日本のうた」セミナーより



栗コーダーカルテット



いよいよセミナー最終回。戦後の名歌の魅力に迫る。 1 / 16 (日) 畑中良輔の「日本のうた」セミナー 第4期

2001年から4年にわたって日本歌曲の魅力を追求してきた、畑中良輔の「日本のうた」セミナー。今年度より「戦後の歌曲」に入り、講師の畑中良輔氏がバリトン歌手として初演した歌曲も取り上げられ、ますます興味深い話が聞かれるようになっていきます。

いよいよ最終回となる1月16日のセミナーでは、現代の作曲技法が先鋭化・多岐化し、歌が生まれにくくなった時代に、なんとかして魅力ある歌を残そうと努めた5人の作曲家に焦点を当てます。1) 越谷達之助(1909～82): 抒情歌曲の作曲家。セミナーで取り上げられる「初恋」は、この1曲だけでも越谷の名は日本歌曲史に残るだろうと思わせる名歌です。歌曲集「啄木に寄せて歌える」の中の1曲で、初恋のほろ苦さが味わい深い旋律に乗せて歌われます。

2) 石渡日出夫(1912～2001): 東京音楽学校(現・東京芸術大学)で信時潔、プリングスハイムといったドイツ系の作曲家に師事するも、近代フラ

ンス音楽の影響の下に才能を開花させた作曲家。抒情性と歌謡性、そして感覚の冴えが光る石渡の歌曲の中でも、セミナーで取り上げられる「鹹湖 汚れちまった悲しみに」は代表作と言えます。

3) 石桁真礼生(1916～96): 戦後の混沌とした状況の中で、作曲家と演奏家の提携グループとして生まれた「新声会」の一員(他のメンバーは柴田南雄、入野義朗、中田喜直、畑中良輔ら)。ドビュッシーの影響の濃い初期を経て、無調や12音技法へと向かい、鴉や鎮魂詞といった傑作歌曲を生み出します。そこでは、耳に心地よい旋律や響きは拒絶され、絶望と死がドラマティックに迫られています。セミナーでは抒情的な初期歌曲「冬の日」が取り上げられますが、先述の2曲はぜひ聴いておきたい名曲です。

4) 畑中良輔(1922～): 日本を代表するバリトン歌手として第一線で活躍する一方、作曲家としても魅力的な作品を残しています。ここでは多くを語らずに、セミナー当日を楽しみに待つことにしまし

よう。取り上げられる作品は、八木重吉の詩による「五つの歌」と「小さな家」です。

5) 小林秀雄(1931～): 「波の会」(四家文子主宰)や「詩と音楽の会」(平井康三郎主宰)の同人として、日本の抒情歌曲の世界に魅力的な作品を発表し続ける作曲家。セミナーで取り上げられる「落葉松」は、美しい旋律が淀みなく流れる名曲で、独唱曲としてだけでなく、合唱曲としても広く愛好されています。

さらにお楽しみ、ゲスト歌手によるミニ・コンサートには、ソプラノの瀬山詠子が登場。長年にわたって演奏してきた石桁真礼生の歌曲を中心としたプログラムが予定されています。日本歌曲を知り尽くした大ベテランによる味わい深い歌唱とともに、4年にわたるこのセミナーが締めくくられます。これまで聴き続けて来られた方はもちろん、初めて参加する方にも存分に日本歌曲の愉しみを味わっていただけるセミナーですので、ぜひご来場ください。 《関根》

栗コーダーカルテットは、日本の「男子四人楽坊」です。 2 / 6(日) 栗コーダーカルテット コンサート

栗コーダーカルテットをご存知ですか? 栗コーダーカルテットは、栗原正己さん、川口義之さん、近藤研二さん、関島岳郎さんの4人から成る、リコーダーカルテットです(ちなみに、栗コーダーの『栗』は、栗原さんの『栗』だそう)。彼らのことを知らなくても、音楽を聴けば「ああ、あれね」と思われる方も少なくないのではないのでしょうか。普段聴き慣れているCMやテレビ番組、映画の音楽などなど、栗コーダーは実に様々な分野で活躍しているのです。例えば、NHK教育テレビ「ピタゴラスイッチ」や映画「クイール」...これらの音楽はすべて彼らが手がけたものですよ。

彼らの魅力は、温かくてやさしい音楽性にあるのではないのでしょうか。レパートリーは可愛らしいオリジナル曲からちょっとお堅い宗教曲まで様々ですが、彼らの手にかかれば、どれもまるで日曜日の昼下がりのほのぼのとした音楽となり、心がほっとするような空気につつまれます。そして栗コーダーは、メロフォン、サクソ、ギター、チューバ、時に口琴(口に咥えてピョーンと音を出す楽器)な

ど、リコーダー以外の楽器も駆使するのです。

見ているだけでも楽しい栗コーダーのコンサート。そんな栗コーダーカルテットが水戸芸術館にやってきました。また、1/23・30・2/5には、彼らによるワークショップ「はじめのリコーダー」が開催されます。こちらは応募受付開始翌日には定員に達してしまいました。たくさんのご応募ありがとうございました。コンサートには、ワークショップ参加者も栗コーダーと一緒に出演します。応援してくださいね。日曜日の昼下がり、栗コーダーカルテットに会い、家族みんなで芸術館へいらっしやいませんか? 《馬場》

栗コーダーカルテットからのメッセージ

栗原「水戸でコンサートをやるのはずいぶん久しぶりだね。」 関島「えーと、1998年以来だから、7年ぶりですか。」 近藤「うわっ。ということは、今回ワークショップに参加してくれた子が生まれたころだね。」 川口「そうだね、1年生で早生まれの子は98年生まれになるね。」 栗原「お、計算が速い。

しかし、栗コーダーカルテットも結構長くやっていますなあ。」 関島「去年の7月で結成10周年ですからなあ。」 川口「10年間やってきた中でも今回のホールはひよっとして一番大きいところではないかなあ。」 近藤「えーと、キャパが680人か、それは大きいです。」 栗原「しかも音が良さそうだ。」 川口「それは気合が入りますなあ。」 関島「ところで、今回は僕らとしては新しい試みがありますね。」 栗原「そうそう。」 川口「えーとですね、結成10年目にして初めてワークショップというものをやってみます。」 近藤「ワークショップは既に申し込みが定員に達しまして、受け付けを締め切りました。」 関島「で、そのワークショップを受講してくれた小学校1、2年生とその親御さんにも参加してもらって、ワークショップの成果を発表してみようということですね。」 栗原「初めてリコーダーを手にしてから数回のワークショップでどんなことが出来るのか、楽しみにして下さいね。」 川口「もちろん、栗コーダーカルテットの普段のレパートリーもたっぷり聞けますよ。」 近藤「ぜひ来て下さいね。」



写真左から；
池辺晋一郎
須川展也
小柳美奈子
猫殿

© 品川雄司

須川展也が切り拓く、現代作品の最高の「楽しさ」をご堪能ください。 2 / 11 (金・祝) 現代音楽を楽しもう - XVIII 須川展也・サクソフォン

「現代音楽」のイメージを払拭する

水戸出身の作曲家で、NHK-TV「N響アワー」などでは軽妙なトークを披露している池辺晋一郎さんが、開館以来続けているのが「現代音楽を楽しもう」シリーズです。おそらく、「現代音楽」の一般的なイメージは、口ずさめるようなメロディーが無く、不協和音がずっと鳴り響いたりして、情感が得られにくく、難解な感じがしてしまうというものではないでしょうか。確かに、第2次世界大戦後から1960年代にかけての前衛作品は、そのような印象を受ける作品が主流を占めました。すべての現代作品がそうである筈がありません。池辺さんの本シリーズは、理屈めきで楽しめる現代作品をセレクトして、皆様にお届けしようとするものです。

新時代の寵児 サクソフォン

第18回目となる今回は、サクソフォンの須川展也さんが登場します。サクソフォンは、ジャズ・バンドやダンス・バンドなどによるポピュラー音楽のジャンルで大活躍している楽器ですが、クラシック音楽の世界でも、多くの作曲家たちを魅了した楽器なのです。ここで、簡単にサクソフォンの歴史をご紹介します。

サクソフォンは、たとえばオーケストラで使われる他の楽器と比べて歴史は浅く、1840年頃に、ベルギー生まれでその後パリに在住した楽器製造業者・アドルフ・サククスによって発明されました。45年にフランスの歩兵連隊バンドに採用されたあたりが、この楽器の最初のお目見えのようです。その後、欧米諸国のうちドイツ圏を除く各地の軍楽隊で愛好されるようになりました。軍楽隊以外では1890年頃からアメリカの吹奏楽団が用いるようになり、以後この国でサクソフォンが流行するきっかけとなりました。やがてクラシック音楽の作曲家たちもこの楽器を注目することになり、ドビュッシーのラプソディー、イベールの室内小協奏曲、ラヴェルのボレロ、プロコフィエフのロミオとジュリエットなどの名作が次々と書かれるようになります。一方、ジャズの世界では、真のジャズの創始者たちであるアメリカ・ニューオリンズの小さなダンス・バンドには、まだサクソフォンは用いられず、最初はトランペット、クラリネット、トロンボーンという編成でした。サクソフォンが重用されはじめたのは、1920年代のいわゆるシカゴ・ジャズ

以降です。そして、30年代のスイングの流行以降、J.ホッジズ、B.カーター、C.パーカー、W.ハーマン、G.ミラー、J.コルトレーンなどサクソフォンの名手が次々と誕生していきます。そして、ジャズの領域で追求されたサクソフォンの演奏法や表現語法は、クラシック音楽でのこの楽器の語法にも大きな影響を与えながら、今日に至ります。

個性的で練達の出演者たち

今回の演奏会に登場する須川展也さんは、テレビ出演も数多く、少し前のタバコのCMにも出演するほどの人気なので、あらためてご紹介する必要などないかもしれませんが、クラシック・サクソフォンつまりクラシック音楽の分野でのサクソフォン奏者の第1人者です。サクソフォンを吹き始めた中学校時代は、朝学校に行く前に海に走っていったマウスピースを吹き、その後学校に行って朝練をしたというがんばりをされたそうで、現在ではわが国の吹奏楽を愛する若い人たちの目標とされる存在です。水戸芸術館では、97年3月に「吹奏楽クリニック」の講師としてお招きしています。また、同年4月にリサイタルを開催、パッサ、ジョブリン、コレリ、ラフマニノフ、吉松隆作品などを演奏しました(共演はチェンバロの中野振一郎さんとピアノの小柳美奈子さん)。今回は、お洒落な現代作品のオンパレード! プログラムの概要は次項で紹介させていただきます。

共演者はピアノの小柳美奈子さんとカウンターテナーの猫殿の2人。小柳さんは、演奏活動やCD録音を共にする、須川さんのパートナー。97年の水戸芸術館のリサイタルでも共演しています。2人の絶妙なコンビネーションは、聴衆からも評論家たちからも賞賛を集めています。池辺晋一郎作品で登場するのが猫殿です。テノールよりも高い音域を出すカウンターテナーの歌手で、その声は性差の壁を越え妖艶に響きます。水戸芸術館では、2000年7月に池辺晋一郎企画の「日本の歌・この100年II 詩人たちの歌」に出演しています。

お洒落で心の琴線にふれるプログラム

池辺さんと須川さんと考えた今回のプログラムをご紹介します。

本多俊之・本多尚美 ジャズ・エチュード

ジャズ・サククス奏者の本多俊行と本多尚美の

作・編曲による本作品は、ジャズの楽想に彩られ、その中にロック風の楽想やサクソフォンならではの狂暴さなどを垣間見せる4曲から成るエチュード(練習曲)です。

池辺晋一郎 軌道エレベーター 声とサクソフォンのために

2004年11月に東京で初演されたばかりの新しい作品です。猫殿の声がどのように絡んでいくのか? また、このタイトルの意味するものは何か? どうぞお楽しみに!

西村 朗 ラメント

ラメントとは死者を悼んで奏される音楽のことです。「挽歌」「哀歌」などと訳されることもあります。ひと吹きで複数の音を同時に出す重音奏法、音高の移動を非常に滑らかに行なうポルタメント、舌先で「r」の音を転がすように奏するフラッターなどの特殊奏法が随所に盛り込まれていて、サクソフォンの新しい音色が追求されています。

佐藤聡明 ランサローテ

佐藤聡明は、欧米で高い評価を得て、近年日本でもこぞって熱い注目を集めている作曲家です。本作品は日本の伝統音楽でも用いられている5音音階に基づいており、その瞑想的で心洗われるメロディーは、本稿の冒頭でも述べた現代音楽の悪しきイメージを覆す好例とも言えるでしょう。

ルチアーノ・ベリオ セクエンツァ VIIIb

2004年6月に水戸芸術館で行なった「ベリオの肖像」公演を補完するののごとく、今回再びベリオ作品が紹介されます。ベリオについては「vivo 2004年6月号」をどうぞご参照ください。セクエンツァのシリーズは、ベリオが演奏者の名人芸の伝統に敬意を表し、現代楽器の可能性をことごとくまで追求した作品群です。

吉松隆 ファジイバード・ソナタ

想像上の生き物「ファジイバード」が、難解な「現代音楽」の領域から軽やかに離脱し、自由な大空へと飛翔する作品。3つの楽章から成り、それぞれ「I. Run, Bird」、「II. Sing, Bird」、「III. Fly Bird」という標題が付けられています。

須川展也さんが、サクソフォンという新時代の寵児とも呼べる楽器を駆使して、お洒落で心の琴線にふれる現代作品の数々を、皆様にお届けします。ぜひ、ご来場ください。 《中村》



武久源造

夢のような次元での共鳴現象 念願のリサイタルが遂に実現します。 2 / 21(月)武久源造 オルガン・リサイタル

7年前の出会いと感動

水戸芸術館ではじめて武久源造さんをお迎えし、オルガン・リサイタルを開催したのは、1997年12月のことでした。この時の体験は筆者にとって、とても衝撃的であると同時に、深い感銘を受けるものでした。

武久さんと初めてお会いしたのは、演奏会の2ヶ月前のことです。都内のご自宅にまでお邪魔して、インタビューを収録させていただきました(その時のインタビューは「vivo 97年12月号」に掲載しています)。色々とお話を伺うにつれ、その飾らない自然体なお人柄と音楽へのひた向きの姿勢に心が打たれたことを今でも鮮明に覚えています。そのお話しの中なかでも、演奏会のあり方に対する武久さんの次のような言葉はとても印象的でした。「僕らが生きている今の時代状況とたとえばバッハの音楽が成立する時代状況というものが、お互いに共鳴し合って、何か僕らにもバッハにも見当もつかないような、独特な第3の波というか、ある種の共鳴現象を起こすんじゃないかという期待が持てるのです。しかもそれが、聴衆ひとりひとりの生きているコンテキストと響き合っていて、独特の何か、それこそ夢の中のような次元をもって、僕らの誰も予想できないような、共鳴現象、共鳴波長のようなものが起こって、それがまた新しいコンテキストを生み出してゆくんじゃないかと思われるのです。」音楽を通して、そこに居合わせるすべての人々とのコミュニケーションの磁場を作ろうとする武久さんの想いに触れ、その果てしない探究の精神と愛情に満ちた他者への眼差しに心が震えました。

そして演奏会当日。ベーム、J.S.バッハ、ブラームス、フランクなどの作品で構成されたプログラムを、確かに武久さんは、聴衆とともに呼吸をしながら、ときに瞑想的で深淵な世界を、ときに喜びに彩られた世界を、鮮やかに紡ぎ出していきました。鳴り止まぬ拍手に応え、果てることなく続けられるアンコールを聴きながら、筆者は「またいつの日か武久さんに水戸で演奏をしていただきたい。今回の演奏会を通じて水戸のオルガンにいつそう慣れ親しんだ次の機会には、もっと素晴らし演奏をしてくださるだろう」と思ったのです。

実りある時間を経て

それからおよそ7年の歳月が過ぎ、とうとう来春、待望の武久源造さんの2回目のオルガン・リサイタルが実現します。この7年間の武久さんはいとうと、精力的な活動から、数々の豊かな実りを結ばせています。まず、器楽と声楽によるアンサンブル「コンヴェルス・ムジウム」の結成が挙げられます。武久さんの音楽によるコミュニケーションの輪は、遂に演奏家間の交流へと広がり、合奏という領野にまで及んだのです。また、コンサート活動と並行してCD録音も重ねています。すでに6枚目となる『鍵盤音楽の領域』シリーズに加え、『オルガンの銘器を訪ねて』のシリーズやコンヴェルス・ムジウムによるアンサンブル音楽の領域』シリーズ、(以上、ALM RECORDS)など、まさに珠玉のディスクがリリースされています。さらに、エッセイ集「新しい人は新しい音楽をする」(アルク出版企画刊)が2002年に刊行されました。武久さんの様々な思索がまとめられた一冊です。

時間旅行の先にある未来

今回の水戸のリサイタルのために武久さんが用意したプログラムは、シャイデマンから現代のハウエルズまで、300年以上もの長大な時間を駆け抜けるものとなっています。

シャイデマン(1595?-1663) プレアンブルム ニ調、キリストは死の縄目につかれても

17世紀ドイツのオルガン音楽の夜明けに位置するのがシャイデマン。「シャイデマンは前世紀の最も良いものを受け継いだ。それは均整のとれたたたずまい、伸びやかな旋律、そして極上のワインにもたとえられるようなあの風格の高さである。しかし彼はそれを携えつつ新しい世界に踏み込んでいる。……17世紀のドイツでは一般に、ルネッサンスとバロック、そして低層流としての中世が緊張感をはらみながら共存し得た。そこにこそ、オルガン音楽の黄金時代をもたらした原動力を見出すことができる。」と武久さんは語っています。

J.S.バッハ(1685-1750) 前奏曲とフーガ 八長調 BWV531、協奏曲 八長調 BWV594

97年の演奏会では、バッハに連なる系譜を意図したプログラムでしたが、今回もバッハの2作品が取り上げられます。世界中のすべてのオルガニストにとって、バッハの作品は必須の作品である

ことは言うまでもありません。汲み尽くせぬ泉のごときバッハの作品を今回武久さんはどのように演奏するのか!? お楽しみください。

ラインベルガー(1839-1901) ソナタ 第8番

ラインベルガーは、ドイツの作曲家・オルガニストで、教師としても大いに尊敬され、人望を集めた人物です。その優れた弟子の中にはフンパーディンクやフルトヴェングラーなどかいます。作曲家としては、19世紀中期からの新しい潮流には乗らずに、バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、初期ロマン主義者たちとの伝統的な結びつきを意識していました。今日では演奏機会が少ない埋もれた名曲を、武久さんは掘り起こし、現代に蘇らせます。

ハウエルズ(1892-1983) 6つのオルガン曲より、タリスの遺言

ハウエルズはイギリスの作曲家。ハウエルズの音楽様式は同時代のバリーからエルガー、ウォルトンに至るイギリスの多くの要素を融合したものとされています。ハウエルズの音楽の最大の魅力は「人々を歌わせること」で、歌曲「ダビデ王」や「来りて歌い踊れ」などは、20世紀イギリスの作曲家の作品の中なかでも最高の出来であるとされています。そして、こうした彼の声楽的な情感は、オルガン曲をはじめ器楽作品にも息づいています。

バルトーク(1881-1945) 武久源造編曲] ルーマニア民俗舞曲集

「楽器の王様」オルガンは、多彩な音を創出できることから、オーケストラにも匹敵する! このことを証明するかのよう、最後に演奏されるのが、バルトークの「ルーマニア民俗舞曲集」です。この曲は、もともとはピアノのために作曲され、その後バルトーク自身によって小管弦楽曲に編曲されました。2004年11月の水戸室内管弦楽団第59回定期演奏会では、この小管弦楽版が演奏されました。武久さんによるオルガン編曲版にご期待ください。

天から授かった命をみつめ、1日1日を悔いのないよう全力で生きる武久源造さんと、私たちは7年ぶりに再会します。今回彼はどのような音楽を聴かせ、どのようなメッセージを届けてくれるのでしょうか? 武久さんと聴衆とスタッフと皆で作る「我々のコンサート」に、どうぞご参加ください。

《中村》



写真左から;
豊嶋泰嗣
川上 徹
鈴木美奈子

豊嶋泰嗣とその仲間たちが、優雅な午後を演出します 2 / 15(火)ちょっとお昼にクラシック4 情熱と郷愁のストリングス

「ちょっとお昼にクラシック」のシリーズは、平日の午後で開催する1時間のコンサートです。クラシック音楽にはあまり馴染みの無い方々でも気軽にお楽しみいただける親しみやすいプログラムと演奏時間、クラシック音楽を深く愛する方々にもご満足いただけるとびきりの演奏 この両方を兼ね備えることで、これまでたいへんなご好評をいただけてきました。

今回は、「情熱と郷愁のストリングス」というタイトルで、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロという3種類の弦楽器とピアノの演奏をお贈りします。出演は豊嶋泰嗣(ヴァイオリン、ヴィオラ)、川上徹(チェロ)、鈴木美奈子(ピアノ)の3人。豊嶋さんは、水戸芸術館専属楽団・ATMアンサンブルのメンバーです。したがって、室内楽奏者としての彼の演奏はしばしばお聴きになった方もいらっしゃるかと思いますが、その独奏をじっくりとお聴きいただくのは、今回が初めての機会となります。しかも、サイトウ・キネン・オーケストラや新日本フィルハーモニー交響楽団などでコンサートマスターの席にも座るヴァイオリンの腕前とATMアンサンブルな

どで存在感のあるヴィオラの腕前の両方が、一度に聴けてしまうというのも楽しみです。川上さんは新日本フィルハーモニー交響楽団の首席チェロ奏者で、さらに豊嶋さん同様、小澤征爾氏率いるサイトウ・キネン・オーケストラや九州交響楽団にも参加し、いずれも首席奏者を務める実力の持ち主です。鈴木さんは、ハンガリーのリスト音楽院に学び、その後はソリストとしての活動とともに川上さんとのデュオの演奏も重ねているピアニストです。

プログラムは、各楽器の独奏曲から出演者全員によるピアノ・トリオ作品まで、さまざまな楽器編成を味わっていただけるものです。ただし等でお伝えしているのは次の3曲。豊嶋さんのヴァイオリン独奏でお聴きいただくのは、サラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」。その魔術的な腕前でヴァイオリンの「巨人」とまで絶賛されたサラサーテが、自らの妙技を最大限に披露するために書かれた作品で、哀調に満ちた第1部、甘美な情趣の第2部、野性的に奔放な第3部から構成されています。川上さんの独奏でお届けするのは、サン・サーンス

の組曲「動物の謝肉祭」より“白鳥”。優雅で清らかな白鳥の姿が巧みに表現された、美しいメロディーをもつ作品です。アンサンブル作品としてはメンデルスゾーンの「ピアノ三重奏曲 第1番」の第1楽章が取り上げられます。シューマンが「ベートーヴェン以来の最も偉大なるピアノ三重奏曲」と賞賛した作品です。ロマンティックでセンチメンタルな情感を湛え、流麗この上ないメロディーや生気に富んだ躍動感が魅力です。もちろん演奏されるのはこの3曲だけではありません。さらにどのような曲が登場するのかは、当日のお楽しみ!

1ドリンク付きで1,200円!! 託児サービスもご用意しておりますので、小さなお子様をお持ちで、なかなかコンサートに行けないというお母様もどうぞお越しください。《中村》

*託児サービスをご希望の方は、1月25日(火)までに水戸芸術館音楽部門・担当:中村、馬場宛てにお電話ください。(TEL:029-227-8118 定員20名・料金500円 定員になり次第、締切らせていただきます。)

最近の公演から

OCTOBER
NOVEMBER



1



2

1~2. オペラの花束をあなたへ

オペラの花束をあなたへ XVI
イタリア・オペラの宝石箱(10月10日)
畑中良輔企画の人気シリーズ「オペラの花束をあなたへ」の16回目は、「イタリア・オペラの宝石箱」と題し、本場イタリアのオペラから選りすぐりの名アリアの数々をお届けした。まずオープニング、牧野正人(バリトン)と谷池重紬子(ピアノ)が「セビリアの理髪師」で一芝居打ち、会場を沸かせれば、小畑朱実(メゾ・ソプラノ)はしっとりとした歌声で聴衆を魅了しきる。一方、片岡啓子(ソプラノ)が日本では滅多に聴けない本格的なドラマティック・ソプラノで聴くものを圧倒すれば、米澤傑(テノール)は「日本のマリオ・デル・モナコ」とも評される輝かしい歌声でオペラティックな快感に会場中を酔わせる。これ以上はないと思わせる声の饗宴に客席から熱い

拍手が送られ、歌手たちは1人1曲ずつのアンコールで応えた。《関根》
アンケートから オープニングはビックリ!でもたいへん楽しかった!(無記名の方) 心が高揚しました。聴いた後で気分がスッキリしました。(無記名の方) 声量の大きさにただ驚きました。初めて耳の鼓膜がふるえるという感覚を味わえました。(北茨城市:C.A.さん) 何度も来ているが、今日のは最高。熱唱、名曲揃い、大迫力。4人×5曲で計20曲、こんなのはじめて!ピアノ伴奏も大変すばらしい。(日立市:Tさん) 題名のとおり、4人の出演者が燦々と輝いた熱唱で、イタリア・オペラのメインディッシュばかりをご馳走になったようで、すばらしい満足感です。(ひたちなか市:Y.K.さん) トウランドットを聴きたくて来たのですが、最初から最後まで素



1



2



3



4



5



6



7



8



9

晴らしかったです。ありがとうございました。(無記名の方)

ロジェ・ムラロ ピアノ・リサイタル
(10月16日)

初来日のロジェ・ムラロのリサイタル。190cmもあるうかという長身のムラロは、まず、ピアノの椅子選びに一苦労。通常使用しているピアノ椅子を1番下まで下げてもまだ高く、結局、脚の短い椅子を使用しました。そして、驚いたのはそれだけではなく手の大きさ。あの大きな手で音を掴み、鋭く鍵盤を叩く。ムラロのダイナミックな音楽は、その大きな手からも生まれていることが頷けました。プログラムは、ラヴェル：.....風にとムソルグスキー： 展覧会の絵、そして、ムラロが最も得意とするメシアン作品から 幼子イエスに注ぐ20のまなざし(第1曲~第10曲)。前半の華やかさからは一転、後半のメシアン演奏では、まるで神が降りてきたかのようなムラロの熱演に会場の緊張感も高まり、ものすごい集中力に包まれました。なお、師事していたイヴォンヌ・ロリオに、ムラロは来日前にお会いしてきた、とのこと。水戸でメシアン作品を演奏するお話をしてきたのでしょうか。《馬場》アンケートから音楽すべてがまるで神の洗礼でも受けて授かった神技でしょう。ムラロの知的な輝いた音色は実に素晴らしい、すごい一言に尽きます。心から感謝をこめてありがとう!!(無記名の方)

ダイナミックな演奏で、とても聴きごたえがあった。展覧会の絵の最後の部分では、思わず涙が出た。ブラボー。(無記名の方) イエスキリストがいるようだった。(香川県:F.F.さん)

茨城の名手・名歌手たち 第15回
(10月23日)

15回目を迎えた「茨城の名手・名歌手たち」。今年は、鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器(以上、ソロ)邦楽アンサンブルを対象に5月29日[土]にオーディションを行い、52組の中から選ばれた、ピアノ4名、パイプオルガン1名、弦楽器2名の7名の名手たちがステージに登場しました。弦楽器の高校生の2人をはじめ、これから楽しみな若手演奏家たちばかり。茨城県出身の演奏家として更に活躍していただきたい、と心から願っております。司会の畑中良輔氏も、終演後、「これからもっと笑顔でステージに立てるように」と、激励の言葉を全員に送っていました。なお、この日はコンサート中に新潟中越地震が起こりました。水戸でも震度3の揺れがあり、お客様をはじめ、まさに演奏中の名手たちが心配でしたが、立派に演奏してくださいました。《馬場》

水戸室内管弦楽団第59回定期演奏会
(11月6、7日)

水戸室内管弦楽団福島演奏会(11月8日)
水戸室内管弦楽団(以下、MCO)の重要な活動の柱のひとつである指揮者無しの演奏会。プログラムは、今年没後100年を迎えるドヴォルジャークの セレナード 作品44、弦楽四重奏曲 第12番『アメリカ』(弦楽合奏版/林光編曲)に加え、MCOが95年に委嘱した林光の ヴィオラ協奏曲 悲歌 とバルトークの ルーマニア民俗舞曲集 の4曲。リハーサルには、林光氏も姿を見せた。悲歌での店村眞積氏の独奏は、まさに「歌う」ような表現で、聴衆の心を掴んだ。ゲスト出演のクラリネットの名手・カール・ライスター氏もMCOとの共演を心から楽しんでいただけた。福島公演では、およそ700人の聴衆が集まり、熱狂的な拍手と歓声を受けた。《中村》アンケートから 林光 悲歌、店村さんを中心としながら楽団員がそれぞれソロ、ソロをみごとに輝かせた。(鉾田町:A.O.さん)弦楽四重奏では表現できない、広さ、深さ、まるさ!ふくらみ!アメリカに感動しました!(無記名の方) 久しぶりのコンサートで感動しました。最初は、涙が出そうになるくらい。第2子を妊娠中です。子供が大きくなったら、一緒に連れてくるのが夢です。(無記名の方)

畑中良輔の 日本のうた セミナー 第4期(2)
(11月21日)

「戦後の歌曲」と題し最終期に入ったセミナーの第2回は、團伊玖磨と大中恩の歌曲に焦点を当てた。「月光を「げっこう」と歌うのがしっくり来ないので、「つきかげ」と歌ったら、それが流布してしまった」(大中恩の歌曲 ふるみちの歌詞について)など、この時期の歌曲の初演を多く手がけた畑中良輔氏ならではの講義は、受講生・聴講者ともに大変参考になった様子。ミニコンサートには、バリトン歌手の松井康司が登場。一語一語、いつくむように歌うその表現に涙する聴衆もいた。《関根》アンケートから畑中先生の解説がいつも大変面白く、楽しいです。来年度もこのような企画を続けて欲しいです。(無記名の方) 畑中先生のお話は楽しく、ためになり、受講生の勉強の成果もわかった。ゲスト歌手も大変すばらしかった。来てよかったと思いました。(つくば市:M.N.さん)

中村真由美・中村佳代
ピアノ・デュオ・リサイタル(11月27日)

水戸を中心に活躍する中村真由美、中村佳代によるピアノ・デュオの公演。かつて、ピアニストの野平一郎は、ピアノ・デュオというのはどんなに細心の注意を払おうと、完璧に合わせるこ

1~2. ロジェ・ムラロ ピアノ・リサイタル 3~4. 茨城の名手・名歌手たち 第15回
5~6. 水戸室内管弦楽団第59回定期演奏会 7~8. 畑中良輔の 日本のうた セミナー
9~10. 中村真由美・佳代 ピアノ・デュオ・リサイタル



10

となどは不可能で、そのズレや違いを楽しむ
かない、息が合うという演奏が可能なのは血の
繋がった兄弟や姉妹の場合であろうという意味
のことを言っていた。この日の中村姉妹の演奏
は、まさにその後者であり、2台のピアノは一体
化し、シンフォニックとも呼べるようなスケールの大
きな音世界を作り上げた。アンコールは、「ホル
スト:組曲 惑星 より“木星”」、「ロンドンデー
の歌(アイルランド民謡)」。《中村》アンケート

から おふたりの息のビタリと合った演奏に感
動し、表現力の豊かさ、テクニックのすばらしさ
に感動しました。また、2台のピアノによる演奏
ということで、ピアノの新たな魅力を感じました。
ピアノがますます好きになりました。(ひたちなか
市:M.S.さん) よく練られている演奏でした。
今後の活躍を祈ります。(無記名の方) 一晩
中でも聴いていたかった。熱演だったのにちっ
とも疲れな素敵な音でした。(N.T.さん)



* netama= ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いろいろなところへ netama します。

年末年始はこのCDで!

冬休みだし今回は、年明けの芸術館コンサートに
登場するアーティストのCDを紹介しよう。このところ、
童話や映画やマンガなど、テーマをしぼってテンショ
ン上げ上げて書いてきたので、こたつに丸くなって蜜
柑食べつこのんびりいきましょう...

まず、サクソフォンの須川展也さん。今回は現代作
品に焦点が当てられているけれど、8年前のリサイタル
をお聴きになられた方なら、須川さんがコレトリに
まで遡る膨大なレパートリーを持っていることはご承
知だろう。そんな須川さんの最新盤は『エキシビジ
ョン・オブ・サクソフォン』(EMI TOCE - 5521 ~ 3)、
3枚組です。3枚組って、ジョージ・ハリスンの
『オール・シングス・マスト・パス』か、はたまたクラッシ
ュの『サンディニスタ』か?ともかく大作です。中身を
知ればさらにびっくり。1枚目は ラブソディ・イン・ブ
ルー と 展覧会の絵 のサクソフォン&ピアノ編曲版
(長生 淳編曲)。2枚目からはサクソフォンのオリジ
ナル名曲が出るわ出るわ、トマジがドビュッシーがミ
ヨーがジョリヴェがダマーズがデュボアがマルタンが
クレストンがデザンクロがデニソフがいやもう満腹
の充実感。各種サクソフォンを持ち替えてのガーシ
ュウィンとムソルグスキーの超絶演奏で度肝を抜い
ておいて、あとはじっくり腰を据えてサクソフォンのた
めのオリジナル作品を聴いていただくというわけ
ですな。サクソフォンのエキシビジョン(展覧会)であ
りエンサイクロペディア(大事典)でもあるこのアル
バム、須川さんとピアノの小柳美奈子さんの名演を
楽しむ聴き手にとってはもちろん、これからサクソフ
ォンのプロを目指す少年少女にとっても必携だろう。
サクソフォンの名曲がこれほどの名演で集成されて
しまったのだから(緒方英子さんの解説も勉強にな
る)。つまり最高の意味でこれはとても教育的なアル
バムでもあるし、同時に「サクソフォンを目指す若者
よ、ここまで来れるか!」と聳え立つ巨大な壁のよう
なアルバムでもある。がんばれば吹奏楽部の諸君。
にしてもああ、ブラジレイラ をこんな風に吹けたら
どんなに素敵だろう!

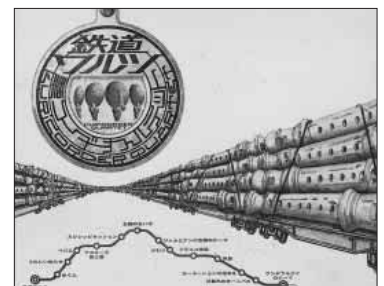
...冒頭で「のんびり」とか言っておいて、いきなりテ
ンション上げ上げだよ。武久源造さんの演奏を聴い
て心を静めよう。武久さんがどんなに音楽を深く見
つめている方かは本文記事の通りだがともかく彼の
演奏を聴いてみたい、という方には以下のCDをおす

すめしたい。まず静かなる衝撃と共に彼の名を人々
に知らしめることになった名盤『鍵盤音楽の領域
1』(ALM - ALCD1001)。ルネサンスからバロック
に至る鍵盤音楽で編んだこの1枚を初めて聴いたと
き、最初の一言から「これはただごとではない!」と
震えた。「何々時代の誰という作曲家の曲を演奏し
ています」ではなく、楽曲を通じてその先にある普遍
なるものへと静かに歩を進めてゆくような演奏。ラ
ミ、レの上での驚嘆すべき即興を聴きながら、その
衝撃は確信へと変わった。以後、変奏ごとに心の視
界がどんどんクリアになり、覚醒した恍惚感へと導か
れる『パッサ:ゴルトベルク変奏曲』(ALM - ALCD1
013)といい、痛切に孤独な心の深淵に降りてゆく
『シューベルト:即興曲集』(ALM - ALCD1019)とい
い、武久さんのアルバムを聴くことは音楽を聴く、と
いう行為の本質と向かい合うことと同義だ、と言っ
て間違いはない。ご自身が書かれる解説がますますご
読み応えがある。最近では自ら率いる「コンヴェルスム
・ムジクム」というグループと刺激的かつ問題提起的
なアルバムを連発しており、最新盤『シューベルト182
0:ます』なんて、いやーかつてこんな演奏なかった
よ。

...やっぱり上げ上げトーンだな。栗コーダー・カル
テットで力を抜こう。「力を抜く」って言い回しは、こ
のグループに対する最高の賛辞のつもり。なんとい
っても彼ら自身のアルバムに「脱力の錬金術師集団」
という謳い文句が冠されているのだから。僕は彼ら
の音楽のピグナーなのだけれど、いやあ、はまります。
リコーダー・カルテットといえばアムステルダム・ルッ
キ・スターダストとかフランダースとか、これは一台の
オルガン? と思わんばかりのアンサンブルで勝負す
るグループの印象が鮮烈なだけに、彼らの演奏を聴
くと最初は「の、のどか!」と思ってしまう。彼らのア
ンサンブルは決して超絶テクで人を圧倒するという
感じではない。だがそのうち、音色の一体感とかフ
レー징の厳格な一致とか、そういうことにとらわ
れていた自分の肩の力が微笑と共に抜けて行く。と
いってもこれは断じていわゆる「ヒーリング・ミュ
ジック」ではなく、音楽の根源的な喜びのひとつであ
る「解放」をもたらしてくれる体験なんだ。彼らの本
職(?)は作曲家だったりサクソフォン奏者だったリ
リコーダーは実は「専門外」なのだけれど、それだけ
にリコーダー・アンサンブルというメディアを批評的に

用いることができる。「僕たちはリコーダーはそう得
意ではないのだけれど」とぼりぼり頭をかいてみせ
ながら、リコーダーの飄然とした味わいの音を武器
に、音楽がゼロからできてゆく現場を、それこそ手作
りで見せてしまう。これは、彼らがすごい音楽家だか
らこそできる、高度な力技なんだと思う。

じっさいスタジオ・レコーディングされたアルバム
の、人なつこい顔をしながら実に洗練された楽曲の
数々はどうだろう。僕が聴いたのはまずサード・アル
バムの『鉄道ワルツ』(KICK UP KUP - 200104)。
ほぼオリジナル楽曲で構成されたこのアルバムは栗
Q入門におすすめる。季節ものとして『栗コーダ
ーのクリスマス』(METROTRON compactron -
55)があるがこれもいい。13世紀のフランスの古謡
から自作まで(ルネサンス中心)選曲がシブい。アレ
ンジがいい。甘味料まみれのクリスマス・ソング類と
は百万光年隔たった、聖歌への純粋な敬意がある。
そして驚愕するのが『公式BOOTLEG』(自主盤な
のか? 00008Bという番号しかないが担当Bによる
この番号に謎が隠されているらしい。ヒントは「縦
にしてみる」だそうだ。あ、そうか!)。全51トラック
CM音楽(うまい)からまったくもってブートレグな音
質のライブ音源「クス同然のリハーサルテイク」(帯
の文句です、念のため)まで収録されたマニアックな
盤。だがこれが、彼らの手作り感を伝える点でも、ル
ネサンスからバロックからロマン派からポピュラーか
らロックからボザノヴァからアリランから、何でも消化
する彼らの音楽のおそるべき雑食性を感じさせる点
でも、この上ない。レッド・ツェッペリンの 移民の歌
には悶絶だよ! 松田聖子の ガラスの林檎 には感
涙だよ! 実は芸術館の栗Qコンサート、芸術館のワー
クショップ関連コンサート史上もっとも売れているの
だが、実際こいつはお子様たちに独占させておくテ
はないぜ! 大人も栗Qに行くべし! というわけで結局
最後までテンション上がりっぱなしだが、これは僕の
性格だからしょうがないんだよ! よいお年を!



栗コーダー・カルテット『鉄道ワルツ』

